

チは ^{201}Tl シンチに比べて梗塞領域を狭く評価する傾向がみられたが、PYPの集積の程度が強い場合は逆の傾向がみられた。心カテとの比較でも、特に one vessel disease の場合、PYPの集積の程度が強い症例では、梗塞領域の範囲を広く評価する傾向がみられた。またPYPの集積の程度と Max. CPK 値の間には相関はみられなかった。

PYP シンチは急性心筋梗塞について左室の病変のみでなく右室の病変についても、病変の広がりを容易に検出できる有用な方法である。

10. RI マルチゲート心プール像のフーリエ2次解析法を用いた検討——局所指標の検討——

島袋 国定	中條 政敬	坂田 博道
島田受理夫	宮路 紀昭	城野 和夫
吉村 広	田口 正人	篠原 慎治
		(鹿大・放)
岡田 淳徳	禰久 豊嗣	(同・放部)

左室心プール像を側壁部、心尖部、中隔部に3分割し、そのおのおのの容量曲線をフーリエ2次項まで近似し、左室の駆出率(EF)、収縮末期までの時間(ET)、最大駆出速度(PER)、PERまでの時間(TPE)、最大充満速度(PFR)、PFRまでの時間(TPF)等の各指標を算出し前壁中隔梗塞6例、肥大型心筋症5例、正常4例を対象として検討した。

その結果、正常例に比し前壁中隔梗塞6例では中隔部と心尖部にEF、PER、PFRの低値とTPE、TPFの延長がみられ、他方asymmetrical hypertrophyのみられた肥大型心筋症5例では中隔部のPFRの低値とTPFの延長がみられ、おのおの心筋梗塞の梗塞部位の診断と肥大型心筋症の拡張期の局所的異常を検出するのに有用な指標と考えられたので報告した。

11. 新生児のクレチン症マスキング陽性例における甲状腺シンチグラフィ

桂木 誠	一矢 有一	桑原 康雄
綾部 善治	和田 誠	松浦 啓一
		(九大・放)
福田 美穂		(福岡市立こども病院・放)
河野 斉		(同・内分泌代謝)

近年新生児のクレチン症マスキング検査としてTSHの測定が行われているが、本検査での陽性例16例に甲状腺シンチグラフィを行った。内訳はクレチン症13例と乳児一過性高TSH血症3例である。放射性医薬品は ^{123}I 100 μCi を用いた。クレチン症の13例ではシンチグラム上形態異常を示す例、位置異常を示す例がそれぞれ5例認められ、正常型が3例認められた。乳児一過性高TSH血症3例では形態異常が1例、正常型が2例認められた。シンチグラムによるクレチン症と乳児一過性高TSH血症の鑑別は困難であった。

12. ^{123}I を用いた甲状腺ヨウ素摂取率測定におけるスペクトロメータの設定条件の検討

松本 政典	(熊大・医短)
三隅 凌	(同・本荘 RI 総研)
古嶋 昭博	(同・放)
金子 輝夫	(熊本市地域医療セ)

^{123}I からの γ 線のNaI(Tl)シンチレーションカウンタによるエネルギースペクトルを多重波高分析器にて計測した。18例の患者について検討した結果、スタンダード測定にネックファントム(ORINS型)を用いた場合、スタンダード測定時のエネルギースペクトルと患者測定時のスペクトルは、非常に良い一致を示した。したがって、ネックファントムは患者からの散乱線の状態を良く再現しており、スタンダードとの比較測定にて摂取率を求める場合、スペクトロメータの設定条件はほとんど影響しないと考えられる。ネックファントムを用いない場合は、両者は異なり、設定条件により摂取率測定値は大きく変化した。